佳作　（低学年の部）

だいきらいなおかあさん

鹿児島県　鹿児島市立中洲小学校　一年

脇田（わきた）　文太（もんた）

「はやく、おきなさーい。」

きょうも、あさからおこられた。「おきなさい」ではなく、「おはよう」っていってほしいのに。あさのおかあさんは、だいきらいだ。まるで、おにばばみたいにこわいかおでぼくをおこる。「おきなさい」のつぎは、きょうふのあさごはんがはじまる。こんどは「はやくたべなさい。」「いつまでたべてるの」まいにち、まいにち、おこられてばかり。だから、あさおきるのがもっとイヤになるのに。おかあさんは、ぼくのきもちをまったくわかってない。

そして、ゆうがたになると、ニコニコして、ぼくをむかえにくる。あさのおにばばのかおがウソみたいだ。ぼくは、おかあさんにきいてみた。「どうして、ゆうがたになるとやさしくなるの？おかあさん、びょうきなの？」おかあさんは、「おこるとわすれるびょう」だといった。ぼくは、あさからおこられて、すごくイヤなきもちになるのに、おかあさんだけわすれるなんてずるいとぼくはおもった。そしたら、となりでさくぶんをかいているのをみていたおかあさんがぼくにいった。

「もんたも、おかあさんがおむかえにくるときは、あさのこと、わすれているでしょ。」だって。たしかに、ぼくもわすれている。ふたりとも、びょうきだときがついた。そしたら、なんだかおかしくなってきて、かきたいことがわからなくなってしまった。

もしかしたら、おかあさんは、おこっているきもちをいつのまにかわすれさせてしまうじゅつをぼくにこっそりかけているのかもしれない。それでも、おしごとがおわってつかれているときに、ぼくにやさしくしてくれるおかあさんのことは、だいすきだ。じゅつのおかげで、あさのだいきらいなおかあさんのことは、ゆうがたになるとわすれている。わすれているときに、ちょっぴりはずかしいけど、さくぶんのしゅくだいのちからをかりて、だいきらいでだいすきなおかあさんに、つたえたい。

「いつも、ありがとう。」

ぼくは、ヨシタケシンスケさんのえほんが、だいすきで、がっこうからかりてきて、よるねるまえに、おかあさんによんでもらう。ヨシタケさんのえほんは、とてもおもしろくてふしぎなえほんだ。ヨシタケさんのえほんをよんでいると、いろいろなかんがえかたがかいてあって、だいきらいなこともだいすきにかえてしまうぐらい、すごいちからをもっているえほんだと、ぼくはおもっている。もしかしたら、ヨシタケさんのえほんを、よんでくれるから、おかあさんのことが、だいすきなのかもしれない。ぼくは、ヨシタケさんとおかあさんのまほうにかかっているかもしれない。だけど、いつも、ぼくのだいすきなえほんをよんでくれるおかあさん、ありがとう。こんどは、ほんとうだよ。